

AR CA DIA

63
WINTER 2015

Okazaki City Museum News

岡崎市美術博物館ニュース
[アルカディア]



OKAZAKI
MINDSCAPE
MUSEUM

岡崎市美術博物館

眼の極楽⑭ 江戸の花園

館長 榊原悟

「歌意図」から「花鳥図」へ

「定家詠月次花鳥和歌図」の遺例は多い。それらを博搜精査し、十七もの作を上げたのは武野恵氏である(武野恵「近世における定家詠月次花鳥歌絵の展開―吉村孝敬作品を中心に―」『ミュージアム』414号 一九八五年)。その筆者も既に名を上げた土佐光起や住吉具慶のほか、光起の子光成、その子光高、狩野探幽、その養子洞雲益信、江戸後期の狩野養川院・伊川院父子、京狩野家の永敬、山本元休、山本素軒、尾形光琳、乾山兄弟、田山派の吉村孝敬など、流派や時代を超えた多彩な絵師の名が並ぶ。これ以外にも作品は伝存しないが、探幽の子探信が延宝度造営内裏の夜御殿裏之間襖にこの画題を取上げているし、田山応挙も恭礼門院(桃園天皇女御 一七四三〜九六)御用の「御屏風定家卿十二月花鳥和歌ノ意」を描いているようだ。この間の時の経過を考えれば、制作された作品はさらに多く、担当した絵師もさらに多彩に及ぶだろう。

またその画面形式も、卷子や画帖をはじめ掛幅、襖、屏風と、扇面や団扇など特殊なものを除き、ほぼすべてが揃っている。

それらは内容と形式とから四つに分類できるといふ(武野氏前掲論考)。いま、それを参考にわたしなりに整理してみる。

まずはその描写内容によって、人物ないし人事的要素の有無を基準に大きく二分すべきだろう(ⅠⅡ)。さらに二分されたそれぞれを画面形式によって、各月を「図」、全十二図で構成したもの①と、十二月の花鳥を大画面に連続構成したもの②とに二分する。まとめれば、次のようである。

- Ⅰ人物・人事的要素が描かれているもの
 - ①各月一図、全十二図よりなるもの
 - ②大画面(屏風)に連続構成するもの
- Ⅱ人物・人事的要素が描かれていないもの
 - ③各月一図、全十二図よりなるもの

ESSAY

②大画面(屏風)に連続構成するもの

Ⅰに人物・人事的要素が描かれるについては、もちろん和歌の内容から人物の何らかの行動が想定できるからに他ならず、その意味でⅠは和歌の意を忠実に絵画化した「歌意図」とみて差支えない。そもそも後仁和寺官道助の企画した「月なみ花鳥の歌の絵」がもし描かれていれば、むしろこうした「歌意図」であったはずである。しかし、それも伝わらないとなれば、さしずめ前回言及した土佐光起の「定家詠月次花鳥和歌図巻」こそがその代表作。他にも土佐光高(二六七五〜一七二〇)の作がある(妙満寺蔵)。いずれも①に分類されるが、土佐派にはⅠに属する屏風絵②の作例も遺る。光起の子で光高(のち光祐に改める)の父にあたる光成(二六四六〜一七二〇)の作である。つまり土佐派は光起―光成―光高三代にわたつてこの定家以来の由緒ある画題を描き継いだこととなる。いかにもやまと絵の伝統を保守する土佐派らしい仕事と云うべきか。

加えてそれら三代三点の各月の図様を較べてみるに、例えばその八月では ①②画面形式に違いはあるものの、秋も半ば過ぎの杉戸を開けて遠く落ち行く雁を眺める公家の姿を描くことで一致する。Ⅰを「歌意図」と見るのも、こうした趣向が凝らされていればこそである。おそらく土佐派内には「歌意図」としての「定家詠」に係わる粉本(手本)類が伝えられていたのだろう。それを原図に三代の絵師たちは作図した。光起の東博本『定家詠月次花鳥和歌図巻』の十一月の、枇杷を手前に置いて千鳥が川面に舞う賀茂の流れを間に、遠く賀茂の紵の森と夜半の月とを望ませた味わい深い一図(図1)など、定家の詠んだ歌の意の見事な表現と云えよう。

とは云え「定家詠月次花鳥和歌図」は、また日本美術史におけるモチーフ選択の問題でもあった。しかもその選択は、あたかも藤原公任による歌詠みの名人選抜「三十六人撰」が、その後「三十六歌仙」として広く受容されたように、どうやら妥当と認められ、ここで選ばれた花と鳥は、月つきを代表する典型とも目されるに至る。そうした花や鳥を描けばこそ「花鳥図」でもあったはずだ。となれば定家を選んだ花と鳥とが近世絵画史の精華とも称すべき画題「四季花鳥図」と無関係であるはずもない。そうした花々、

樹木を、最もそれらしい姿(典型)で描くことで四季性Ⅱ季節感を担保する。「四季花鳥図」こそは、それであったはずだろう。定家が選んだ花と鳥は、そのための表現に最良のモチーフとなるに違いない。

その意味で興味深いのが、Ⅱである。人物・人事的要素の全く見られないグループである。要するに各月、その月の定家詠の花と鳥のみで構成する。それらが「定家詠」のそれだと気付く者のみが、それと合点するだけで、純然たる「花鳥図」と称して誤りない。「定家詠月次花鳥和歌図」で遺例が多いのは、実はこれである。

なかでも注目したいのは探幽の作である。三点を数える。すべて法印時代、寛文二年以降の晩年の作となる。ミシガン大学図書館本の六曲一双押絵貼屏風、藤田美術館本の十二幅対、出光美術館本の画帖・帖である。だが藤田美術館本も、その縦長画面から元は押絵貼屏風で、掛幅に改めたものとみられる。実際、他の絵師の作でも、この押絵貼のものが多し。洞雲本、具慶本(高津古文化会館蔵)、素軒本、光琳本(静嘉堂文庫美術館蔵)などである。この画面と押絵貼屏風との相性のよさを物語る。しかし、それも当然か。六曲一双の屏風ならばパネルの数は十二枚。一枚にひと月分の花と鳥を当てれば、十二月月ピタリ十二枚でこと足りる。十二月月花鳥に六曲一双の押絵貼屏風は、まさしく天の配剤と云うべきだろう。

そして探幽こそは、この配剤に気付いた最も早い絵師の一人ではなかっただろうか。と云うより、そもそもⅡのタイプの「定家詠月次花鳥和歌図」を描いた最初の絵師が探幽ではなかったか。あくまで現存作品と云う条件付きながら、Ⅱの筆者の中で世代的に最年長者は探幽だからである。しかも探幽は、例えば名古屋城上洛殿三の間北側襖「雪中梅竹遊禽図」(寛永十一年・二六三四)や大徳寺本坊方丈襖「雪中梅花白鷺図」(寛永十八年)の梅樹に雪を積もらせ、明らかに定家の詠じた「年のこなたに勾ふ」体とするなど、早い時期から「定家詠月次花鳥和歌」を知っていたふしさえある。いや、さらに後年、この画面は、元禄四年刊行された『鳴の羽搔』の挿図によって広く知られることになるのだが、その挿図の図様が、まさしくミシガン大学本のそれに酷似することから挿図の制作にも探幽作品が何らかの係わりをもっていたと臆測する。少なくとも『鳴の羽搔』の挿図が探幽様であることは間違いない(図2)。

その探幽のミシガン大学図書館本の二月。満開の桜の木の元にたたずむ雉が一羽描か

ESSAY

れているだけである。だが、定家が詠んだのは、花見に野に出た道行き人であり、妻問う雉の声を聞いてたたずむ狩人(鷹匠)の姿であったはずだ。現に光起本の二月ではそうした人物・人事の描写に重点が置かれ、雉の姿はむしろ背景に添えられているに過ぎない。その点は八月も同様で、遠く雁を眺めやる公家を詠んでいたはずなのに、探幽はその姿を捨てるだけでなく、背景なども一切描くことをやめ、画面は落ち行く四羽の雁と鹿鳴草・薄とに限った。この図様で「定家詠月次花鳥和歌図」の一図だと気付く人がどれだけのいるだろうか。その点は多かれ少なかれ、ミシガン大学図書館の探幽本のすべての図に言えるように思うのだが。中でも十二月の雪の積もる梅樹に鴛鴦(図3)など、図柄が十二図中最もまとまりがあるだけに、もはや図を定家詠と見る必要さえも無い。この梅が、名古屋城上洛殿三の間と大徳寺本坊大方丈の襖絵に登場することは、既に述べた。定家詠図の定家詠離れ、まさしく十二月の「梅に鴛鴦図」は一幅の「花鳥図」である。そう言えば、ミシガン大学図書館本も藤田美術館本も、いずれも定家詠の和歌書は付いていない。和歌が無くて鑑賞できる、とでも言うのだろうか。「定家詠月次花鳥和歌図」の思いもかけぬ表現である。描写対象をできるだけ削ぎ落とし簡素化することで、逆にモチーフを際立たせる。探幽得意の手法である。

だがこの画面は、花と鳥のモチーフに興味を持つわたしたちにとって、さらに興味深い作を遺してくれていた。Ⅱの②こそがそれである。



図1

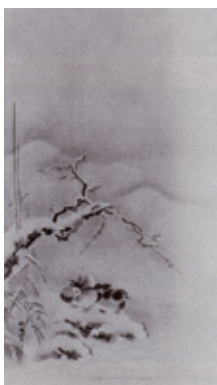


図3



図2

図1 11月 枇杷 千鳥 土佐光起筆 東京国立博物館蔵
図2 12月 早梅 水鳥『鳴の羽搔』より
図3 12月「梅に鴛鴦図」狩野探幽筆 ミシガン大学図書館本

生活スタイルの変化や技術の進歩に伴い、私たちは多くの便利な道具に囲まれて生活し、さらなる利便さや快適さを求めています。一体、私たちはどれだけの道具に囲まれて毎日を暮らしているのでしょうか。平成時代も四半世紀が過ぎて昭和の時代でさえ「昔の暮らし」になった今、手作業を伴う伝統的な道具たちが姿を消していくなかで、単なる懐かしさからだけでなく、便利一辺倒ではなかった生活の良さが見直されてもいます。

この展覧会は暮らしの変遷をテーマに、当館が所蔵する明治から昭和時代にかけての暮らしの道具を中心に、小学校で使われた教科書、お節句に飾られた雛人形や土人形などを紹介するものです。これらの道具類は多くの方々からの寄贈品でもあり、身近な郷土の暮らしを伝える資料として公開・活用し、後世へ引き継ぐことを兼ねた展覧会でもあります。いつもは収蔵庫でガラクタとも揶揄され、肩身の狭い思いをしているモノたちの晴れ舞台でもあります。

展示構成

□暮らしを支えた道具たち
明治から昭和時代にかけての生活

道具を紹介していきます。個々のモノからは、道具に託した使用者の気持ちや伝わってくるとともに、その道具の歴史や文化としての奥深さも感じられます。

□子どもの暮らし

—学校と遊び—

むかしの小学校の教科書や道具類を中心にして、子どもたちが遊んだおもちゃなどを展示し、学びと遊びの道具のうつりかわりを探ります。

□お節句

—ひなまつり・端午の節句—

ひなまつりと端午の節句に関わるお節句飾りと、素朴な愛らしさの土人形から東北地方の土人形を中心にご覧いただけます。子どもの誕生を祝い、その成長を見守ってきたお人形たちをお楽しみ下さい。

そして、今回は「昭和の頃」をテーマにした『木彫り教室きつつき』の会員みなさんの作品もお楽しみいただけます。

また、公立小学校3年生の学習「古い道具と昔のくらし」を支援できるように学習時期に合わせて開催します。平日は学校団体見学が予定されています。子どもたちに昔の道具の実物

EXHIBITION

を間近に見る、触れる機会を提供し、昔の人たちが大切に道具を使っていたということを感じてもらいたい、そして、身の回りの古い道具を探す、昔の暮らしを探る手助けになればと考えています。

道具のかたちや機能は時代によって様々な変化をしていくなかで、長い年月をかけて人びとが築き上げ、伝承してきた生活の知恵と工夫は新しい道具のなかにしっかりと受け継がれているものです。会場ではみなさんの家にもあった懐かしい道具が、きっと見つかることと思います。若い世代や子どもたちには新鮮な驚きと発見があることでしょうか。みなさんが持っている暮らしの記憶、子どもたちに伝えてみませんか。道具を使った経験談こそ、何よりの解説になるはずですよ。

最後に、数々の資料をご寄贈下さいました方々に心よりお礼申し上げます。今後とも当館の資料収集や活用につきましてご協力を賜りますことをお願い申し上げます。



昭和30年代茶の間風景再現(平成25年度展覧会の様子)

収蔵品展 暮らしの うつりかわり

伊藤久美子

会期：平成27年1月31日(土)～3月29日(日)

郷土色が強く集客性、話題性に欠けるといふ「矢作川流域の歴史と文化」から「十六・五世紀の世界と国際交流、宗教を含む精神文化」に展示テーマを一新。展示手法も常設展示を基軸としてたまたに展示を撤去して企画展を行うという当初の計画から、テーマに沿った企画を連発する体制へと方向転換しました。開館記念の特別企画展ともども一年間の企画を松岡正剛事務所+電通に委ねてのスタートです。松岡氏の名前は学生時代に話題となっていた雑誌『遊』の編集・執筆者として知っていたのですが、実際にお目にかかるのと、広範な読書歴を背景に知の世界を自由に涉猟する姿に圧倒されたものでした。展示についてはデザイナ―の内田繁氏、学芸のアドヴァイザ―に衛藤駿慶応大学教授をお願いして開館企画展「天使と天女」の準備がスタートしました。企画や図録編集の大半は東京で行われ、それに沿っての資料借用の実務は岡崎でとまったのですが、ここで歯車がずれ始めます。

普通学芸員が交渉し信頼関係を築き、責任を負うため館の名前で借用願が出されるのですが、松岡正剛事務所が差出先となり、会場岡崎市美術博物館とだけ記された借用願が直接各館宛に出

されてしまったのでした。このため岡崎側への問合せが殺到、慌てて各館への弁明や再依頼に出張することとなりました。最初に謝罪に訪れたのがサントリー美術館で、その時対応していただいたのが榊原悟学芸員。現当館館長との最初の出会いでした。

そんなまわり道もあつたのですが、開館および展覧会の準備は夜を徹して進められました。次にかみ合わなくなつたのが図録についてです。松岡氏サイドは編集のプロ、松岡氏の構想を生かすため、その挿図にはルーブル美術館所蔵品など今回借りることができない世界の名品がずらりと掲載され、本として完結したものとなつていたのでした。えつ、展覧会の図録は、衛藤先生を先頭に学芸は疑問を呈していきます。一般に展覧会図録は展覧会の記録性を前提に作成しますが、もちろん様々な条件下で借りたくても借りられないものも出てきますがあくまでも実物重視で、展覧会を見ていただき、本物に接していただいたものが基本となります。「新しい展覧会図録の在り方を目指す」「本として完結できるならば展覧会は必要ない」「制約はあつても借りられる実物でいかに表現できるかが展覧会。」と様々な意見が噴出、図録

に対する見解から展覧会自体への考え方の違いへと広がつてしまいました。「天使と天女」の展覧会自体は松岡氏の卓越した構想の基に、内田繁氏の演出性に富んだ効果的な展示空間が十分に生かされた今までにない展覧会になったのですが、両者の溝は埋めがたく、松岡正剛氏監修の展覧会はこの一本のみとなったのでした。

COLUMN & TOPIC

さて、華々しい幕開けの後に待つていたのは、次の展覧会。さあ何を。本来は松岡正剛事務所に今後の企画製作を任せる予定でいたのが白紙となり、「天使と天女」展会期中に次の企画を急遽作り上げなくてはならなくなつたのでした。開館時、愛知芸術文化センターで行つた報道発表で、旧来になく新しい美術博物館、新しい展覧会を強調したため、旧来のと呼ばれた先行の美術館・博物館や展覧会を主催してきた新聞社からは相手にされず、孤立無援でのスタートを余儀なくされたのでした。

そこで企画したのが「ジャズの街角」。当時寄贈を受けたばかりの内田修ジャズコレクションの紹介展でした。収蔵

品展を間に挟み、歌舞伎座による舞台美術を再現した「歌舞伎の美と心」展と続けていきました。この後、自転車操業を続けながら、他館や新聞社との関係修復を行つていきました。

開館時の慌ただしさを乗り越え軌道に乗り始めた途端、精神的支柱であつた衛藤先生が鬼籍に入られてしまったのが残念でなりません。

あれからもう二〇年。家康公没後四〇年でお忙しい芳賀徹前館長には、長年の館長職のお礼とご健勝をお祈りし、榊原現館長には今後の美術博物館の益々の発展へのご指導をお願いして筆を擱きます。



二〇一四を振り返って

館長及び各学芸員が、昨年一年間で印象に残った文化関連の事柄を列挙いたします。

榊原館長

①「白絵―祈りと寿ぎのかたち」(神奈川県立博物館)
②「高野山の名宝」(サントリー美術館・あべのハルカス美術館)

多少、手前みそ風の選択になってしまいが、この二つの展覧会上げる。①は「白絵屏風」という、出産の際、産所に立てられるための屏風を中核に「白絵」の遺品を展示し、その意味を探ろうとする。かつて「白絵屏風」について論文をものした者として、こうしたテーマで展覧会ができるとは!!しかし、今後「日本美術辞典」が編まれば、「白絵屏風」が項目として立てられることは疑いなく、その際、本展の図録は参考文献の一つになる。②は、わたしがかつて勤めていた美術館の展示。そこでこんな仏教美術展が開かれるのは、まさしく隔世の感がある。運慶作「八大童子像」の素晴らしさ。美術館の鑑賞に適した空間の中で、これを見る機会が得られるのもいいことだ。その意味で、東京国立博物館の「日本国宝展」も上げておくべきかも知れない。企画性から云え

ば、どうってことない展示だが、十年に一度はこうした展覧会は必要だろう。そうでもなければ、国宝を見るには、いつも図版によるだけで、本物を目にする機会なくなってしまっただけだ。

荒井副館長

二〇一四年は展覧会もあまり見ず、本も新しいものに手を出さず堀江敏幸の読み返し。クラシックCDは新旧取り混ぜ購入枚数三二九枚。その内何枚聞いたのだろうか。取りあえずお気に入りを選んでみました。

モーツァルト『ピアノ協奏曲第20・25番』(アルゲリッチ(P)アバド指揮モーツァルト管弦楽団)

巨匠同志の最後の録音。歳をとっても自由闊達な二人に脱帽。

細川俊夫『管弦楽作品集第1集』『同第2集』(準・メルクル指揮ロイヤル・スコティッシュ・ナショナル管弦楽団他)

武満徹亡き後の日本を代表する作曲家の力作群。

『マザーランド』(カティア・ブニアイティシヴィリ(P))

バツハからペルトまで、透明感溢れる詩情世界が広がっています。

展覧会では、奈良国立博物館「国宝

醍醐寺のすべて』展。七万点近い文書聖教の国宝指定の記念展。歴史における聖教の重要性を示した圧巻の展覧会でした。

堀江

「柴田家文書展 吉田藩士の地図コレクション」(豊橋市美術館)

吉田藩士柴田善信が集めた地図の紹介であるが、地域のみならず世界地図も含まれ、鎖国時代の世界認識に驚かされる。

「名器を切り、名器を継ぐ、美術にみる愛蔵のかたち」(根津美術館)

銚や金継で修復された茶器。その修復の跡をも美的鑑賞に取り込んだ日本人の美意識に敬服。

「岐阜が生んだ原三溪と日本美術」(岐阜市歴史博物館)

美術品を守り、伝えることでの企業家が果たした役割について考えさせられる。

村松

「バルテュス展」(東京都美術館)

バルテュスの仕事の全体像を俯瞰して見ること、彼が求めた芸術の真意とはいかなるものであったのかを改めて考えさせられる展覧会であった。

「ミッド・ナイト・イン・パリ」(ウッディ・アレックス監督)

主人公の小説家ギルが一九二〇年代にタイムスリップして、ダリなどのシュルレアリストたちと出会うシーンが可笑しい。

『アート鑑賞の玉手箱』(白鳥正夫著)

「展覧会が十倍楽しくなる!」とコピーがあるように、その裏側のドキュメント。第一章に「展覧会への夢、陰の支え役」と題して当館の「村山槐多の全貌展」の奮闘が紹介されている。

浦野

「熊野―聖地への旅―」(和歌山県立博物館)

世界遺産登録十周年記念。四駆同時公開された国宝・熊野速玉大社神像は圧巻の迫力。

「国宝久能山東照宮展―家康と静岡ゆかりの名宝―」(静岡市美術館)

徳川家歴代将軍所用の甲冑が初めて勢揃い!企画、展示した学芸員の努力に感涙。

「日本国宝展」(東京国立博物館)

祈り、信じる力を改めて実感。間近に見る阿弥陀聖衆来迎図と縄文のビーナスの美に溜息。

千葉

「物語る私たち」(サラ・ポリー監督)

COLUMN & TOPIC

ドキュメントとフィクションの見事な交叉。サラの歯茎が印象的。

「女つ気なし」(ギヨーム・ブラック監督)

もの悲しさと愛おしさ。さびれた地方と冴えないヴァンサンの魅力。

「赤瀬川原平展」(千葉市美術館)

開催のタイミングで逝去され、残念。膨大な作品資料のうちに、時代への恨とユーモアをみた。同時期開催中の洗練された「高松次郎展」とのギャップも印象的。

内藤

「超高速！参勤交代」(本木克英監督)

陸奥湯長谷藩四代内藤政醇が主役の歴史コメディ。内容自体、歴史を知らない人でも楽しめる内容ですが、一万五千石しかない内藤氏が幕府に参勤交代を強要され、必死に有り金かき集めてなんとか江戸に上る姿は身につまされます。また内藤家が時代劇の主人公になるという想定は今後もあり得ないでしょう。そういう意味でも貴重です。

伊藤

「再発見 歌麿 まぼろしの(雪)」(岡田美術館)

「京へのいざない」(京都国立博物館平成

知新館

「山本鼎のすべて展」(上田市立美術館)

内容というより新しいミュージアムから三件。岡田はセキュリティチェックに驚き、京都は質量ともにさすが、上田は多目的施設の中での今後に期待。

湯谷

「ホキ美術館 常設展」

絵の中の女性に一目惚れ。写実画の大作に圧倒されました。

「湖都大津のこもんじょ学」(大津市歴史博物館)

「古文書みりよく発見！」と同じ志から企画して、同じ苦悩を味わったんだろうなと勝手に仲間意識を抱きました。

「仏像入門〜ミホトケをヒモトケ!〜」(鎌倉国宝館)

タイトルに偽りなし。分かりやすくて見応えがあり、コスパも◎。

COLUMN & TOPIC

長浜のこと

湯谷翔悟

抑々博物館に勤める人間というのは概して自由人でありまして(※意見には個人差があります)、そんな輩の集いし旅行が「お見事！計画通り!!」と進んでくれなどと希うこと自体がおこがましいのでございませぬ。そんな旅の進行役を任せられちゃあかないませぬよ。つるかめつるかめ。

時は師走の二十二日。行くは近江長浜十二名、バスでの日帰り珍道中。館の年忘れ会を兼ねての旅行に参りました。長浜は雪の予報、車中には雨女のU氏。川端康成の名言が脳裏を過る雲行き怪しい旅立ち。：がまさかの想定外。トンネルを抜けると晴天であった。車中には晴女のU氏、小生も晴男。多数決にお天道様も随って下さったようでありませぬ。

初々最初の旅の目的地、十二面観音様の鎮座まします渡岸寺。お寺横の資料館の「戦火をくぐり抜けたホトケたち」なる展示に少し嫌な予感を感じながらもまずはお参り。お寺の方のこなれた解説に、ほーなるほどと唸ります。法隆寺展の国宝夢違観音様がイチ推しだった二千十

四年の当館。これまた国宝の仏像で年納めです。拝み応えある仏様に、後ろ髪引かれながらお寺を後に。「あー五分予定を過ぎたなあ」と少し焦りながらバスへ乗り込みます：「ここへ寄らずに行ったら、アタタ一生言われ続けるよ！」(原文ママ)と言われたら、一番の下っ端が逆らえるハズもありません。けどホント言えばボクも見たかった訳で。バスの運転手さんに頭を下げ下げ、見所凝縮の良い展示に皆満足願。結局三十分遅れで渡岸寺を後にしました。

とまあバタバタで始まった珍道中もその後は大過なく進みまして、無事岡崎に戻ってこれたのであります。「お見事！計画通り!!ヨッ、名幹事!!」と自賛したいところですが、三日前に行程を変更するという為体、一番の問題児は私だったようです。バスの運転手様、旅行会社の担当者様、有難うございました。迷々幹事っぷりはどうか御寛恕ください。くわばらくわばら。

INFORMATION

収蔵品展

暮らしのうつりかわり

2015年1月31日(土)～3月29日(日)

■子ども向け展示説明会「子どもわくわく!教室」

対象:小学生

内容:ワークシートをやりながら昔の道具について調べてみます。

日時:2月7日(土)、2月14日(土)、2月21日(土)、3月1日(日)、3月8日(日)

いずれも午前11時から

■展示説明会

日時:2月14日(土)、3月8日(日)

いずれも午後2時から

※本展覧会は学習支援展示を兼ねていますので、平日は学校団体見学があります。

岡崎市旧本多忠次邸企画展

「ほんとのうえのツクリゴト」

2015年2月14日(土)～3月29日(日)

開館時間:午前9時～午後5時

(入館は午後4時30分まで)

会場:岡崎市旧本多忠次邸(東公園内)

休館日:毎週月曜日

観覧料:一般200円/小中学生100円

*市内小中学生は無料*各種障がい者手帳をお持ちの方とその介助者は無料*

岡崎市美術博物館年間パスポートをお持ちの方は一般160円となります。

出品作家:城戸保、高橋耕平



家康四〇〇年祭

今年の家康が没してから四〇〇年ということで、家康ゆかりの岡崎、浜松、静岡の各市で記念行事が行われる。当館でも家康の講演会や家康史跡をまわるバスツアーを予定している。私自身、家康に三〇年ほど向かいあってきたが、その人物像の一端を明らかにできればと考えている。江戸時代にも家康没二〇〇年、三〇〇年の区切りあることに家康ゆかりの寺院で催事が行われている。これらは家康を弔うための回忌法要である。今年四〇〇年祭、家康を利用する目的は様々である。観光、地域活性化など、家康は「全国区」の人であるために岡崎でもこの人の力を借りたい。

家康が岡崎に残した有形の遺産は少ない。しかし、岡崎に生まれ、生活したことは厳然たる事実である。家康が岡崎の町に付与したという塩の専売に関する塩座の特権も、江戸時代を通じて岡崎の町が家康を利用して権益を保持してきたものである。明治になってからも、岡崎の町では塩座特権を認めるよう政府に申し入れているが、さすがこれは認められていない。家康の御威光も江戸時代まで、明治以降は維新政府により、反徳川による狸親父の負のイメージが作られる。

家康四〇〇年祭、正しい歴史理解にむけて活動の視点を定めたいものである。(堀)

おしゃべり、あれこれ。

旅のススメー宝とヒカリー

十二月初め、東京へ向かった。閉幕目前の東京国立博物館「日本国宝展」を観るためである。本展は祈りをテーマに「人々の祈り、信じる力」がどのような形を結び、今に伝わるのか、日本文化形成の精神を見つめ直す壮大な展覧会であった。厚い人垣を縫って見た、「阿弥陀聖衆来迎図」の縦二〇cm、横四二〇cmに及ぶスケールの大きさ、艶やかな色彩や聖衆の生き生きとした描写に圧倒され、「縄文のビーナス」の豊かな曲線美にうっとりさせられた。今回話題の「善財童子像」はテレビの特番の印象とは大きく異なり、実物は別格の愛らしさであった!やはり映像や写真には限界がある。光の当たり方、見る角度、細部の描写や色彩など、改めて実物に相対してこそその魅力を感じた。

次に「ヒカリ展」を観るため国立科学博物館へ。科学館は何十年ぶり。太陽や星、光る鉱物、光る花や魚など自然界の様々な「光」を集め、その魅力や不思議に迫る展示で、光とは何かという原点から光を用いた最新技術までパラエティに富んだ内容であった。仕事柄、歴史や仏教美術に偏っていた脳の別の部分が刺激され、久しぶりに何だかワクワクした。新たな年に向け、様々な感性が揺さぶられた、充実の旅であった。(浦)

編集後記 | 恒例となった「暮らしのうつりかわり」展を最後に、改修工事のため、当館は1年間の休館に入ります。全国的にみても、同じ時期に建設された美術館・博物館が軒並み工事休館に入っていて、「どこに行けば展覧会が見られるの!」と流浪の民になってしまう美術・歴史ファンも多いのではないのでしょうか。私もその一人。各館のリニューアル後の活動を楽しみに待ちたいと思います。(千葉)

表紙図版:《享保雜》江戸中期～明治初め



開館時間 午前10時～午後5時

※最終の入場は閉館時間の30分前まで

休館日 月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)

年末年始 ※展示替えのため臨時休館する事があります。

[岡崎市美術博物館ニュース/アルカディア] 第63号 2015年1月発行

編集・発行 岡崎市美術博物館(マインドスケープ・ミュージアム)

〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内

TEL.0564-28-5000(代表)

岡崎市美術博物館

<http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/bihaku/top.html>

ARCADIA